

A Christmas Carol の世界
—主人公 Scrooge における過去をめぐって—

篠田 昭夫

The World of A Christmas Carol
— On the Past in the Life of Scrooge, the Hero —

AKIO SHINODA

スクル - ジ(Ebenezer Scrooge)は過去のクリスマスの幽霊(the Ghost of Christmas Past)に生まれ育った土地へと連れて行かれる。

He was conscious of a thousand odours floating in the air, each one connected with a thousand thoughts, and hopes, and joys, and cares long, long, forgotten! (26)¹⁾

彼が長年忘却していた無数の想念、希望、喜び、苦労などと結びついた無数の香りが空中に漂っているという描写には、作者ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)自身の心情が色濃く投影されているように感受される。それは次の箇所より一層明確に看取できよう。

They walked along the road, Scrooge recognising every gate, and post, and tree; until a little market-town appeared in the distance, with its bridge, its church, and winding river.

(Ibid.)

何処とも固有名詞は示されていないが、ここに描かれている小さな町がチャタム(Chatham)とそれに隣接するロチェスタ - (Rochester)であり、湾曲する川がメドウエイ川(River Medway)であることは指摘するまでもなく明らかである。この場所はいうまでもなくディケンズが5歳から10歳までの穏やかで幸せな幼年期を過ごしたホ - ムタウンであり、処女作から最後の作品に至るまで倦むことなく作品の舞台として、あるいは回想の対象として取り上げている場所である。そして更に、1860年8月に約40年間住み続けたロンドンを離れて、チャタムとロチェスタ - の近郊にあるギャズヒル・プレイス(Gad's Hill Place)に居を構え、1870年6月に他界するまでの10年間を過ごすという故郷回帰まで行っているのである。1850年のクリスマス作品である*A Christmas Tree*の中で、“the bright atmosphere”²⁾と形容している程の幸福な幼年時代を過ごした心の故郷に、楽の音に感応する空気の笑顔を響き渡らせているのも、ごく当然の発露といってよい。

... the broad fields were so full of merry music, that the crisp air laughed to hear it. (27)

擬人法により幼年時代と心の故郷への讃歌のヴォルテ - ジが一気に最高レベルへ昇りつめている。最高の感化力を持つ音楽³⁾と結び付けられているだけに、その感は深まり強まるばかりである。

ところが、ここから叙述のト - ンが転調する。幽霊とスクル - ジの眼前に読書に熱中している一人の孤独な少年の幻像が現出する。

... a lonely boy was reading near a feeble fire; and Scrooge sat down upon a form, and wept to see his poor forgotten self as he used to be. (Ibid.)

続けて次のような描写が展開されている。

‘Why, it's Ali Baba!’ Scrooge exclaimed in ecstasy. ‘It's dear old honest Ali Baba!’

Scrooge exclaimed in ecstasy. ‘Yes, yes, I know! One Christmas time, when yonder solitary child was left here all alone, he *did* come, for the first time, just like that.

Poor boy! ' (28)

これは最初の数行を引用したに過ぎず、更に “ Valentine and his wild brother, Orson ” (Ibid.) や “ Robinson Crusoe ” (Ibid.) などにも同工の反応を示して呼び掛けるスクル - ジの異様とも思える程の「興奮と高ぶり」(“ his heightened and excited face ”)(Ibid.)を描写した箇所が続くのである。この場面はクリスマスを迎えて他の子供達が全て親元へ帰省した寄宿学校に一人置き去りにされたスクル - ジ少年が、孤独を紛らすために読み耽っていた書物の登場人物の幻影が「驚くほどリアルにくっきりと」(“ wonderfully real and distinct ”)(Ibid.) 現出して、それに対して まるで実の兄弟に呼び掛けるかのごとき態度 ⁴⁾を示している 60 歳くらいかと想像されるスクル - ジの姿が活写されている。と同時に、生涯を通して深い愛着を込めて色々な作品で言及し引用し続けた *Arabian Nights* に代表されるお伽噺が、幼少期のディケンズの唯一の慰めであり支えでもあった事実 ⁵⁾も見てとることができる。とりわけ 10 歳当時他の家族全員が父親の転勤に伴ってロンドンへ移った後、幾ら彼の才能を高く評価してくれたジャイルズ(William Giles, 1798-1856)の指導の下でその学期の終わりまで勉学を続ける為という名目があったにしても、チャタムに一人残されたディケンズが当然襲われることもあったと思われる深い孤独を、お伽噺のみが癒し救いの手をさしのべてくれた事実を見てとることができよう。

それと 1822 年 12 月にジャイルズとチャタムに別れを告げて単身ロンドンへ出て両親や弟妹達と合流したディケンズを待ち受けていたのが、父親の負債のみが膨れ上がって債権者達が連日押し掛けてくる上に、生活費はおろか食事にも事欠く窮乏状態であり、学校への通学は見果てぬ夢と化し、日々の行為といえは質屋通いをさせられては少しでも換金できそうな品物をなけなしのお金に換えることのみ。かくして手の届かぬ遙かなる存在となってしまう学校への憧憬が教室で読書に熱中しているスクル - ジ少年の姿に投影されている ⁶⁾ことも、見落としてはならない事実である。なおディケンズは *A Christmas Carol* ⁷⁾ (1843)において、スクル - ジの下で働く事務員ボブ・クラチット(Bob Cratchit)とその家族が住むカムデン・タウン(ロンドンへ出たディケンズを迎えた住居があった)の “ four-roomed house ” (43)と、長男ピ - タ - (Peter Cratchit)が質屋通いをさせられたこともあるらしい(“ Peter might have known, and very likely did, the inside of a pawn-broker's. ”) (49)という設定と叙述を通して、作品世界にさりげなく織り込むということも行っている。

そして 1824 年 2 月の余りにも有名な大事件が出来る。ディケンズがウォ - レン靴墨工場(Warren's blacking-warehouse)に働きに出され、その直後に債権者の訴えにより父親がマ - シャルシ - 債務者監獄(the Marshalsea Prison)に収監されたために、母親と弟妹達もその後を追って獄舎に移るといふ。

Scrooge's former self grew larger at the words, and the room became a little darker and more dirty. The panels shrunk, the windows cracked; fragments of plaster fell out of ceiling, and the naked laths were shown instead; ... He only knew that it was quite correct; that everything had happened so; that there he was, alone again, when all the other boys had gone home for the jolly holidays. (29)

教室という設定になっているが、羽目板がゆがみ、窓にひびが入り、天井の漆喰がはげ落ちて木摺が露出しているこの場所がウォ - レン靴墨工場を叙したものである ⁸⁾ことは申すまでもない。読書に熱中していた当時よりも成長したスクル - ジが相も変わらぬ孤独を以

前の読書では紛らすことができず、絶望的な様子で歩き回る(“walking up and down despairingly”)(Ibid.)ことで耐えようとしている姿に、チャタム時代への郷愁と学校への憧憬を圧倒し押し潰して、暗たんとした絶望感のみに襲われることとなった 12 歳当時のディケンズの姿が凝縮されているように感受される。

It [The door] opened; and a little girl, much younger than the boy, came darting in, and putting her arms about his neck, and often kissing him, addressed him as her ‘ Dear, dear brother. ’

‘ I have come to bring you home, dear brother! ’ said the child, clapping her tiny hands, and bending down to laugh. ‘ To bring you home, home, home! ’

‘ Home, little Fan? ’ returned the boy. (Ibid.)

孤独感に苛まれて絶望の淵に沈まんとしていた少年に思いがけなくも救いの手が差し伸べられた。それも幼い妹によって。名前をファンという。クリスマスが巡ってきても一度として帰省できず、惨めで寄る辺なき想いに打ちのめされていた兄の救出に、幼いファンが駆け付けてきたのである。それも自ら父親を説得して。

‘ Father is so much kinder than he used to be, that home's like Heaven! He spoke so gently to me one dear night when I was going to bed, that I was not afraid to ask him once more if you might come home; and he said Yes, you should; and sent me in a coach to bring you. And you're to be a man! ’ said the child, opening her eyes, ‘ and are never to come back here; but first, we're to be together all the Christmas long, and have the merriest time in all the world. ’ (Ibid.)

何とも奇妙な家庭風景ではある。母親が存在しているのかどうかすら不明なのであるから。ファンのセリフの中でも全く言及されていないので、存在していないものと見なさざるを得ないが、幼女が居るというのに 何よりも不可欠の存在である筈の母親の影すら認められないというのは、どうしても不可解きわまる話しではある。それに父親もファンに対してはともかく、息子であるスクール - ジに対して妙に無関心であり冷酷である。‘ once more ’ とファンが言っているところから察するに、機嫌のよい時を見計らって再度頼み込んでやっと兄の帰館の許可を父親から引き出したという感じである。寄宿学校へ何年か息子を預けっ放しにしたまま クリスマス休暇が巡ってきても一切の帰省を認めないという態度は、息子という存在自体が疎ましい事情が少なくとも父親の側に存していたことを物語っている。10 歳前後の少年の一体何が父親にここまで無慈悲な態度をとらせたのか。その間の経緯は説明が皆無であるので全ては謎に包まれたままである。ファンの説明から推察できることは、経済的にか年齢的にかは不明であるが、クリスマス休暇で区切りをつけて学校から退学させる息子を実社会へ放り出す過程の「途中下車」⁹⁾として、珍しくも帰省することを認めたらしいということである。フェジウィグなる老人(Fezziwig)が経営する商店に年季奉公中のスクール - ジの幻影がこのシ - ンに続けて登場してくることからも、それは容易に察知できよう。それとともに、ファンの懇願に多少は気持ちが動くということはあったかも知れないが、父親が息子を暖かく迎えて共に「楽しいクリスマス」¹⁰⁾を過ごしたとは到底思えない。「お父さんが普段よりずっとやさしくおなりになり、家の中が天国のようよ」というファンの喜びに満ちた説明も、実体は息子を寄宿学校から引かせることで経済的負担が無くなるばかりでなく、クリスマスの終了とともに即座に年季奉公に出すこ

とで相手からの礼金を懐に入れることができる、という欲得ずくの打算の上に成り立つ父親のあくまでも冷酷で情け容赦のない心境の変化の表れでしかないかも知れないのである。作者は何故ここまで暗く冷えびえとした父親像と、その存在すら確認できない程徹底して無視する姿勢から浮き彫りになってくる、父親像以上に凍り付いた母親像を記述したのであろうか。その答えを探るにはディケンズとその両親との人間関係に目を向けざるを得ないのである。

1847 年の 3 月か 4 月のある日、友人でもあり相談相手でもあったフォ - スタ - (John Forster, 1812-76) から子供の頃のディケンズがストランドの近くの店で働いていたのを見たという人が居るが、という質問を受けたのが引き金となって、ディケンズは心に秘めて絶対に口外することのなかったおのが過去を初めてフォ - スタ - に語って聞かせるだけでなく、筆をとって自伝を執筆することを試みた。だがこの自伝は未完に終わり、CC から数えて 5 番目のクリスマス作品である *The Haunted Man* (1848) と *David Copperfield* (1849-50) に虚構化された形で使用され、織り込まれることとなったのである。この自伝的断片がウォ - レン靴墨工場とマ - シャルシ - 債務者監獄をめぐって、ディケンズが翻弄され塗炭の苦しみに喘いだ時期を扱っていることは述べるまでもない。そして更に、その借金癖から一家の経済と生活を滅茶苦茶にしまった父親と、それに連動する母親の姿勢に対する想念と感情が記述されていることも述べるまでもない。

まず、父親に対するものから見てゆくと、例えば次のように述べられている。

We worked, for the light's sake, near the second window as you come from Bedford Street; and we were so brisk at it, that the people used to stop and look in. Sometimes there would be quite a little crowd there. I saw my father coming in at the door one day when we were very busy, and I wondered how he could bear it¹¹⁾.

「嘆願書の提出により、債権者との間に示談が成立し、支払い不能債務者法の適用」¹²⁾により 3 ヶ月間収監されていたマ - シャルシ - 債務者監獄から出所した後も、晒し者同然の息子の惨めな姿を見て、よく平然としておられるものだという父親に対する不信と断絶の想いが吐露されている。それでも、息子のためというより傷つけられた自尊心の発露からではあったが、彼はディケンズをウォ - レン靴墨工場から辞めさせて学校へ行かせようという気持ちを抱くようになった。だがそれに真っ向から反対したのが母親であった。

My mother set herself to accommodate the quarrel, and did so next day. She brought home a request for me to return next morning, and a high character of me, which I am very sure I deserved. My father said I should go back no more, and should go to school. I do not write resentfully or angrily: for I know how all these things have worked together to make me what I am: but I never afterwards forgot, I never shall forget, I never can forget, that my mother was warm for my being sent back¹³⁾.

よく引用される有名な ‘I never afterwards forgot’ 以下の箇所に母親への情念が赤裸々に綴られていることは今更指摘するまでもない。とはいえ、こうして改めて見つめてみると、三回も反復される ‘I never’ に込められたディケンズの母親に対する怨念と憎念の深さと激しさには戦慄を覚える。母親にしてみれば借金癖だけが目立つ亭主が当てにならない以上、僅少でも間違いなく毎週正確に入ってくる息子の給料を頼りとしていて、それが途切れることを恐れて、ディケンズの復職を強く望んだのも無理からぬ心理状態といつてよい。

だが、5ヶ月も続いた靴墨工場における孤独で屈辱的な生活を更に引き延ばそうとした母親の姿が、当時12歳のディケンズの目に不当な犠牲を一方的に強いる悪魔的イメージを持つものとして映り焼き付いたとしても、これはこれで避けようのない当然の展開としか形容の仕方がない感じである。ましてやジャイルズも認めたごとく幼時より人並みすぐれた能力を発揮していたとなれば、幾ら12歳の少年であったとしても、ディケンズの内で母親をタ・ゲットとして揺れ動き渦巻く激情の凄まじさは想像を超えるものであったと思われる。

作者自身の両親への上述のごとき想念と激情がスクル・ジの両親の人間像とその叙述に投影されていることはもう述べるまでもあるまい。スクル・ジの母親が全く姿を見せない抹殺された存在であること、そして父親が冷酷である上に息子という存在にまるで無関心な人間像に仕立てられていること等が、ディケンズのおのが両親に対するうっ屈を極めた心的姿勢の直截的な投影と発露を基盤として生み出されたものであることも、もう述べるまでもない。

ところで、ファンというスクル・ジの幼い妹のモデルがディケンズの2歳上の姉ファニー (Fanny [Frances] Dickens, 1810-48) であることは論を俟たない。ただ姉を幼い妹に変容させて創造した作家の内面は複雑にして微妙なものがありそうである。弟が靴墨工場で屈辱の日々を過ごしている間、ファニーは奨学金を得ていたこともあるが、王立音楽院(the Royal Academy of Music)の寮で生活しながら勉学の日々を過ごすという恵まれた状態にあった。父親が出所し得てディケンズも合流して両親と共に暮らす状態に戻った時(但し靴墨工場の仕事は未だ続けていた)、王立音楽院に出掛けてファニーが何かの賞を受けるのを見た。その時の想いを自伝的断片の中で次のように認めている。

I could not bear to think of myself — beyond the reach of all such honourable emulation and success. The tears ran down my face. I felt as if my heart were rent. I prayed, when I went to bed that night, to be lifted out of the humiliation and neglect in which I was. I never had suffered so much before. There was no envy in this¹⁴⁾.

ファニーのことになると「ディケンズは彼としては珍しい程の異常な熱中ぶりを常に見せた」(“he manifested always to a degree otherwise quite unusual with him...”¹⁵⁾)とフォースタは上掲の引用に続く箇所ですべて、姉に対してディケンズが無条件の愛慕をいつも注いでいた姿を指摘している。肉親の中でファニーだけがディケンズと気持ちが通い合い信頼しあっていたことは周知の事実であり、フォースタの指摘は間違いでもないし誤解でもない。しかし、12歳当時のディケンズの心情に、或いはこの当時のことを回想している時の心情に屈曲した陰りが差し込まなかったのであろうか。姉の晴れやかな姿を見ながら、その絶望的なまでの落差に打ちのめされているディケンズの内に両親への怨念は当然として、姉を妬ましく思う気持ちが存していなかったと言い切れるであろうか。自伝的断片においても嫉妬はなかったと記述されてはいるが、額面通りには到底受け取れない。ましてやこの当時からディケンズがおのが能力の非凡さに揺るぎない自信を抱いていたとなると、一層その印象が強まるばかりである。それ故、少なくとも12歳当時の暗く惨めな記憶を起動させて紙面に投影する時のディケンズの内面に、ファニーに対する苦く屈折した想念が抑制できないまま忍び寄り取り付いていたと想像されるのである。それと同時に、両親への憎念と絶望が強まれば強まるだけ、唯一人信頼の置ける存在として、姉ファニー

に縋り付き支えを得たいという心情も深まっていったのではあるまいか。そうした反撥と傾斜が複雑に絡み合う心情と想念を、ディケンズは 12 歳当時の記憶に触れた時は抱いていたといつてよいように思われる。両親への絶望とそうしたファニ - への心的姿勢とを源流として、“ You are quite a woman, little Fan! ” というスクル - ジの讃美の叫びに集約されるファンの、幸福な家庭の象徴的存在たる「家事を取り仕切る生き生きとしている小柄な女性」¹⁶⁾としてのイメ - ジが創造されたように感受される。とはいえ、「そよ風にも耐えられないような華奢な女性」(“ a delicate creature, whom a breath might have withered! ”)(30)として設定し、当然のごとく早世させることで、少年スクル - ジを覆っていた暗たんたる孤立がその後も付きまとして離れなかった事実を示すことを通して、ディケンズの絶望感と孤立感が投影されていることは明らかである。つまりそれだけ、その記憶に執拗に付きまとして離れない憎悪や絶望などが、CC を構想し執筆している時点においても、12 歳当時の原体験におけるのと負けず劣らず、重苦しく激しくディケンズの中で揺れ動き渦巻いていたということである。いずれにしても、CC のような公刊した作品において、マ - シャルシ - 債務者監獄とウォ - レン靴墨工場とにまつわる少年期の記憶を、チャタム時代の幸せな想い出と絡めながらスクル - ジの幼少期における人生行路をめぐる物語として仕立てたのは、ディケンズとしても初めての試み¹⁷⁾ということであり、相当な決断と覚悟を経て実行に踏み切ったのではないかと想像される。或いはそれ相応のゆとりと自信がディケンズの内に芽生え確立されていたからこそ行い得たのであろうか。CC の執筆を開始したのが 1843 年 10 月上旬。その直前の 9 月 14 日にディケンズは友人の画家スタンフィ - ルド(Clarkson Stanfield, 1793-1867)とともにある貧民学校(ragged school)を訪問した際に、長男のチャ - リ - (Charles [Charley] Dickens, 1837-96)くらいの年齢(6 歳)の利発そうなマッチ売りのボロをまとった幼児と出くわす。この時点では誰にも口外していなかったおのが暗く惨めな子供時代を、この出会いを契機としてディケンズは想起することとなる¹⁸⁾。更に同じ 9 月に又しても一向に改まらない父親の借金癖が発覚して、その返済の責任が当然有名作家である息子の彼に降り掛かってきたという出来事も、12 歳当時のことを自ずとディケンズに想起させる一因となったかも知れない。そうしたもろもろの要因が相乗的に作用して、ディケンズをして債務者監獄と靴墨工場をめぐる叙述を CC において、屈曲させ虚構化した軌跡を辿りながら行わせたといつてよいように思われる。

同じことが成人となった(“ a man in the prime of life ”)(33)スクル - ジを描いているシン - ンについても指摘できよう。この場面のスクル - ジは独りではなくて傍らに喪服を着た若い娘が居る。名前をベル(Belle)といい、どうも婚約者のようである。そのベルの口から青年スクル - ジの金銭への飽くなき執念に取り付かれて別人と化した姿が指摘される。

‘ Another idol has displaced me; and if it can cheer and comfort you in time to come, as I would have tried to do, I have no just cause to grieve. ’

‘ What idol has displaced you? ’ he rejoined.

‘ A golden one. ’

‘ This is the even-handed dealing of the world! ’ he said. ‘ There is nothing on which it is so hard as poverty; and there is nothing it professes to condemn with such severity as the pursuit of wealth! ’ (34)

このスクル - ジの貧乏と富の追求に対して厳しく当たり指弾する世間への怒りを爆発させ

た感じの叫び声はディケンズ自身のものである。既述した父親の借金癖に起因する債務者監獄と靴墨工場をめぐる孤独で惨めな体験に根差して、強烈に付きまとう不安と一体化した執念を金銭へ集中させるスクル - ジの生き方は、誇張化された形をとっているとしても、ディケンズ自身のそれが投影されたものであり、その意味でスクル - ジはディケンズの分身的存在¹⁹⁾と呼んでさしつかえない人物なのである。1836 年の結婚以来早くも 4 人の子供をもうけていた上に、妻キャサリン(Catherine Dickens, 1815-79)の胎内には 5 人目も宿っているという状態に加えて、前述したごとく宿痾ともいうべき借金癖を性懲りもなく繰り返してやまない父親を抱え込んでいたディケンズが、本篇 CC の執筆を思い立った動機の一つに少なくとも 1000 ポンドもの収益をあげて、貧乏からは離脱し得ていたとしても絶えることなく付きまとう経済的不安を解消したいという狙いがあったことは周知の事実である。(もっとも刊行後僅か 5 日間で 6000 部も売れるという圧倒的な人気が出たにもかかわらず、装丁を豪華版にしたことがたたって CC の初版からは 200 ポンドを少し上回る収益しかあげられなかったが。)という風に、CC を執筆する時点までディケンズに大なり小なり金銭への不安と執念が絶えず取り付いては懊悩させていたことは否定できない事実であり、そうしたものが抑え難く吐露されたという印象を強く受けることも否定できない。

かようなスクル - ジを諷めるベルがその名前²⁰⁾からして理想の女性像として創造されていることは明らかである。いうなればスクル - ジの善き天使²¹⁾の役割を演じているといつてよい。17 歳から 4 年間熱烈な恋情を注ぎ続けたが、身分違いということで失恋に終わった銀行家の娘マライア・ビ - ドネル(Maria Beadnell, 1810-86)を初めとして、妻となったキャサリン・ホガ - スとその妹で姉の結婚とともに同居するようになって、その機知に富む人柄で義兄を強く魅了したけれども、1 年後に僅か 17 歳で他界してしまい、文字通りディケンズの「夢の女」となったメアリ - ・ホガ - ス(Mary Hogarth, 1819-37)に至るまで、現実的にはディケンズを少しでも受け入れて癒しと救いの力を発揮してくれた女性は皆無である。それ故に、作者の願望と希求を託した理想の女性像たるベルが産み出されることとなったと思われる。上掲の引用もそうだが、次の場面からもそれが痛い程感受される。

They were in another scene and place; a room, not very large or handsome, but full of comfort. Near to the winter fire sat a beautiful young girl, so like that last that Scrooge believed it was the same, until he saw *her*, now a comely matron, sitting opposite her daughter. The noise in this room was perfectly tumultuous, for there were more children there, than Scrooge in his agitated state of mind could count; and, unlike the celebrated herd in the poem, they were not forty children conducting themselves like one, but every child was conducting itself like forty. The consequences were uproarious beyond itself; but no one seemed to care; on the contrary, the mother and daughter laughed heartily, and enjoyed it very much;... (35)

お世辞にも裕福とはいえないが居心地のよさと活気に満ち溢れた明るく楽しい家庭風景が描出されている。このいかにも健全で模範的とも思える家庭の中心に揺るぎない地位を占めているのがベルであることはいうまでもない。母親である彼女が笑みを絶やさず慈愛深く見守っているからこそ、子供達も安心して動き回ることができる訳で、これぞまさに理

想の女性像に支えられ営まれている理想の家庭像以外の何物でもない。ここにディケンズの家庭なるものの存在²²⁾を信奉しようとする姿勢を看取することができよう。持ち切れないうちの子供達へのプレゼントを抱えたボ - タ - を伴って帰宅した父親の登場とともに沸き上がる歓喜の叫びをを描写したいにもクリスマスらしい場面(36)が続くだけに、なおさらその感が深まるばかりである。

それはそれとして、ベルが主婦として築きあげてきたこの家庭に不自然な感じが付きまとうことは否定できない。“the haggard winter of his life”(37)という記述からどう見ても60歳前後には達していると思われるスクル - ジのフィアンセであったという事実から、相棒のマ - レ - (Jacob Marley)が死の床についていたという後で引用する場面から考えて、7年前の場面で登場しているとはいえ、ベルもどう考えても50歳前後の年齢に達している筈である。その彼女に幼児はおろか赤ん坊までもが存在するというのは、孫ならばともかく余りにも不自然である。活力に満ちた和気藹々とした理想的な家庭を描写している内に、つい力が入り過ぎて思わず知らずこうなってしまったのであろうか。恐らくそうではあるまい。筆が踊ったというだけでは片付けられない存在があるからである。いうまでもなく、スクル - ジも見まちがえた若き日のベルの面影をそのまま宿していると描写されている娘のことである。この娘だけが大人びていて、他の賑やかに騒いでいる弟妹達が幼児のごとく設定されているというのも何か奇妙な感じがするけれども、それを敢えて承知の上で、というよりはそれが眼中に入らない程のヴォルテ - ジを持って、といった方がよりの確な形容といえる衝動に作者が襲われ、つき動かされたことの帰結として、この奇妙な家庭風景が産み出されることとなったように思われてならない。それは突然一人称体に視点が変わって叙述が進められる次の箇所より、それを明確に感受することができる。

And yet I should have dearly liked, I own, to have touched her lips; to have questioned her, that she might have opened them; to have looked upon the lashes of her downcast eyes, and never raised a blush; to have let loose waves of hair, and inches of which would be a keepsake beyond price: in short, I should have liked, I do confess, to have had the lightest licence of a child, and yet to have been man enough to know its value. (36)

美しい姉を襲撃しては好き勝手をしている弟妹達の中に何時の間にか語り手が、というより作家自身が闖入して、この娘に触りたい、キスをしたい、話しかけたい、目を見つめたい、という願望というか欲望を剥き出しにして語っている場面である。そのため抑制も何もかも捨ててしまい、三人称体の枠も奔流のごとき熱情の噴出で押し流されてしまった生々しく情感が迫ってくるタッチで描写が展開されている。つまりベルが二重に存在していて、熟年に達しているベルの娘として登場している乙女は、青年スクル - ジの婚約者であった若いベルがそのまま登場してきているとしか解釈できない設定と叙述が繰り広げられているのである。母親が二人存在しているとともに、実体からいえば乙女のベルが母親であるという奇怪で複雑な家庭風景が描き出されているということである。それだけマライア・ピ - ドネルに加えて、メアリ - ・ホガ - スへの見果てぬ熱情が複合されて増幅された情念や想念が抑制できない激流と化して紙面に投影され照射された記述が展開されることとなり、唐突な一人称体による生々しい叙述となって流露したといつてよいのではあるまいか。いずれにしても、クリスマスを主題とする作品における叙述態度としては禁忌を犯したとしか思えない乱暴で強引きわまりないやり方である事実は否めないが、慈愛と寛容

を最も痛切に感得するシ - ズンであるクリスマスであるからこそ、却って空虚で満たされぬ現実から離脱して、全くの片想いに終わった初恋の相手と夭折した義妹への想いがいや増しに募っていったとも考えられよう。肉親の目にもディケンズが構想の段階でかつてないほど興奮していると映った事実²³⁾や、彼自身が CC に深い愛着を抱いていた事実²⁴⁾は、当然作品の出来映えに自信を持っていた²⁵⁾からこそ現出したものであることは論を俟たない。と同時に、例えば二人のベルの創造という磁場がディケンズを吸引してやまず、自ずとその内に興奮と愛着を惹起させる軌跡を描いた側面もあったのではないか。それが的外れの妄想とは思えないくらいの強烈で生々しい官能性に溢れた描写が繰り返されているからである。

これに続く夫が事務所にいるスクル - ジを見掛けたとベルに語る場面を見せることで、過去のクリスマスの幽霊の任務は完了となる。

‘ Mr. Scrooge it was. I passed his office window; and as it was not shut up, and he had a candle inside, I could scarcely help seeing him. His partner lies upon the point of death, I hear; and there he sat alone. Quite alone in the world, I do believe. ’ (37)

このシ - ンを正視できないスクル - ジが何処か他へ連れて行ってくれと懇願するのに対して、幽霊は過去を忠実に再現しているだけだと言葉を返す。

‘ I told you these were shadows of the things that have been, ’ said the Ghost. ‘ That they are what they are, do not blame me! ’ (Ibid.)

死にかけている相棒のことは全く念頭にない風情で、クリスマスに背を向けて遅くまで事務所にこもって銭勘定に熱中している 7 年前の非人間的であるとともに孤独の極みとしかいいようのないおのが姿を眼前に突き付けられたスクル - ジは、“ Remove me! I cannot bear it! ” (Ibid.) と叫ぶ。更に “ Leave me! Take me back. Haunt me no longer! ” (Ibid.) と絶叫して格闘しながら幽霊を何とか押し潰し得たスクル - ジは、極度の疲労を覚えるとともに抗しきれない睡魔に襲われて、おのが寝室に戻っていることを確認するいとまもなくベッドに倒れこみ深い眠りに落ちるという件で、スクル - ジの過去を扱った CC の Stave は幕となるのである。

CC の第二節を通して、幼年時代からマ - レ - の死が出来る 7 年前までのスクル - ジの過去が、過去のクリスマスを媒体として明らかにされる。そして、幽霊によって否応なしにおのが過去を幻像の形で示され突き付けられたスクル - ジは、最終的には相棒の死にも冷淡で無関心な人間と化したおのが姿を、幸福で理想的な家庭を築いているかつての婚約者ベルとその夫との間で交わされる噂話で提示されるという効果的な方法により、徹底的に打ちのめされてしまう。その帰結として無抵抗のまま底なしの睡眠状態へと落ちていったのであった。ということは、ここでスクル - ジが一度は死を体験することを意味していると解される。そして、Stave でスクル - ジが目覚めることが、死を体験することで浄化されたこの男の蘇りと復活を意味していると解することができよう。過去の再演に接することで、特に守銭奴の兆候が現れ始めた彼に付いていけなくなったベルに婚約を解消された後のおのが歩みの持つ荒涼たる風景に壊滅的なダメ - ジを受けたスクル - ジは、支柱としていた拝金主義に徹した人生態度の救われようのない空虚さをいやという程思い知らされ、存立の基盤を喪失してしまった。クリスマス・イヴの夜に過去のクリスマスの幽霊の導きによりかような体験をすることとなったこの守銭奴が、死からの帰還を意味する

深い睡眠から覚醒することで、汚れや歪みが洗い流されて脱け落ちた人間として復活を遂げたということである。スクル - ジは現在のクリスマスの幽霊(the Ghost of Christmas Present)が登場する Stave 1 に続く Stave 2 において、未来のクリスマスの幽霊(the Ghost of Christmas Yet To Come)の導きにより、無縁墓地の荒れ果てたおのが墓を示されて自己の惨めな死を確認する(70)展開を辿るけれども、これは完全に悔い改めないといこうなるぞという念押しのメッセ - ジが未来からの予告として送られてきたものであって、実質的には Stave 2 の閉幕とともに死による浄化作用と復活再生を遂げていることは、これまで考察してきた通りである。

未来のクリスマスの幽霊に示された放置されたままのおのが墓の前で幽霊に必死の助命嘆願をしたスクル - ジは、次のように叫ぶ。

‘ I will honour Christmas in my heart, and try to keep it all the year. I will live in the Past, the Present, and the Future. The Spirits of all Three shall strive within me. I will not shut out the lessons that they teach. Oh, tell me I may sponge away the writing on this stone! ’ (70)

三人の幽霊の教えを守り過去にまで遡って全面的に悔い改めた人生態度を保持すると。かくしてスクル - ジの蘇りと再生が成就する運びとなった訳である。この直後に目が覚めた彼は全てが一夜の夢であった事実を認識するやいなや、“ I’m quite a baby. ” (72)と歓喜の叫び声をあげる。つまり過去にまで遡って復活再生を遂げて生まれ変わったスクル - ジとして、新しい出立をするというメッセ - ジを発表しているのである。何とも明るい雰囲気の下にスクル - ジの人間性の全的変容が繰り広げられている²⁶⁾ところに、CC が永く愛好されてきた理由の一つが存していることは申すまでもない。

スクル - ジは文字通り全的変容を遂げた存在として自信に満ちた歩みを行っていくが、作者ディケンズも過去を少しでも忘却し決別することで、新しい一歩を踏み出すことができ得たであろうか。CC の明朗闊達な筆致からすると、本篇の執筆中は或いはそうした気分になることができたかも知れない。だが、4 年後の 1847 年のこの小論でも触れた自伝的手記に端を発する 5 番目のクリスマス作品である *The Haunted Man*(1848)を経て、翌 49 年から 50 年にかけての *David Copperfield* において、過去と全的対峙を行うことを余儀なくされたディケンズの軌跡を見ていると、所詮は 1843 年のクリスマス・シーズンにおける束の間の幻想に過ぎなかったのではないかという想いが強く残ることは否定できないのである。

(注)

1)テキストとして *Christmas Books* (The New Oxford Illustrated Dickens, 1966) を使用。引用文に続く括弧内の数字は頁数を示している。

2)*Christmas Stories* (The New Oxford Illustrated Dickens, 1964), p. 10.

3)例えば 1866 年のクリスマス作品である *Mugby Junction* に登場するフィ - ビ - (Phoebe) という 1 歳の時からずっと寝たきりの状態にある女性が、おのが運命に積極的に明るく勇気を持って対処している姿勢を、ディケンズは音楽と結び付けることを通して最高の讃辞を捧げて描き出している(拙著『チャ - ルズ・ディケンズとクリスマス物の作品群』[溪水社, 1994], 98 頁を参照)。

- 4) Cf. Edwin H. Eigner, "On Becoming Pantaloon" (*The Dickensian*, vol. 89, 1993), p. 181.
- 5) Harry Stone, *Dickens and the Invisible World: Fairy Tales, Fantasy, and Novel-Making* (London: Macmillan, 1979), p. 56.
- 6) Michael Slater, *Dickens and Women* (London: J. M. Dent, 1983), p. 33.
- 7) 以下 CC と略す。
- 8) Malcolm Andrews, *Dickens and the Grown-up Child* (Houndmills: Macmillan, 1994), p. 107.
- 9) "stop-over" (Paul Davis, *The Lives & Times of Ebenezer Scrooge* [New Haven: Yale University Press, 1990]), p. 40.
- 10) "happy Christmas" (Paul Davis, *ibid.*).
- 11) John Forster, *The Life of Charles Dickens — Memorial Edition —* (London: Chapman and Hall, 1911), vol. 1, p. 34.
- 12) 松村 昌家編『ディケンズ小事典』(研究社出版, 1994), 5 頁。
- 13) John Forster, p. 35.
- 14) John Forster, p. 33.
- 15) John Forster, p. 34.
- 16) "a bustling little woman superintending the household" (Catherine Waters, *Dickens and the Politics of the Family* [Cambridge: Cambridge University Press, 1997], p. 76).
- 17) Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Sinclair-Stevenson, 1990), p. 410.
- 18) Kathleen Tillotson, "A Background for A Christmas Carol" (*The Dickensian*, vol. 89, 1993), p. 167.
- 19) "Scrooge is in one sense an exaggerated aspect of Dickens himself" (Peter Ackroyd, p. 412).
- 20) 普通名詞としての belle は "beautiful or most beautiful woman" (POD⁸) という意味を持っている。
- 21) "his [Scrooge's] good angel" (Michael Slater, "The Triumph of Humour: The Carol Revisited" [*The Dickensian*, vol. 89, 1993], p. 188).
- 22) Frances Armstrong, *Dickens and the Concept of Home* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1990), p. 152.
- 23) "his [Dickens's] sister-in-law said she had never seen him more excited by a project." (Paul Davis, p. 7).
- 24) 1843 年 12 月 19 日付の Charles Mackay 宛の手紙の中で、"I was very much affected by the little Book myself" とディケンズは CC に深い愛着を抱いていることを述べている (*The Letters of Charles Dickens*, vol. three: 1840-1843, eds. Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson [Oxford: Clarendon Press, 1974], p. 610)。
- 25) 1843 年 11 月 10 日付の Forster 宛の手紙の中で、ディケンズは "It will come wonderfully I think." と CC の出来栄に対する自信を披瀝している (*The Letters of Charles Dickens*, vol. 3, p. 595)。
- 26) Michael Slater, "The Christmas Books" (*The Dickensian*, vol. 65, 1969), p. 19.

